

挨拶をすること

代田中・1 南 遥矢

僕は、今年中学生になった。入学した頃は、小学校の生活とは大きく変わり、戸惑うことが多かった。今ではすっかり中学校生活に慣れ、部活動や勉強を頑張っている。新しい友達もたくさんでき、毎日が充実していると感じている。僕に友達ができたきっかけは、挨拶だと思っている。

僕には、高校生の姉がいる。姉と僕がまだ幼い頃から、母によくこう言われていた。

「挨拶と返事はきちんできるといいよ。」

最初は、公園などに行くときに、母が会う人に、

「こんにちは。」

と言い、それを姉が真似して言い、そしてそれを僕が真似していったと、姉が話していた。そうするうちに、だんだん自分から挨拶ができるようになっていった。

小学生になり、通学班の誰よりも早く、道ですれ違った人に挨拶をしようとして張り切って、

「おはようございます。」

と言っていた。ある日、母がうれしそうな顔をして、仕事から帰ってきた。

「今、近所の人に会って、『遥矢くん、挨拶できてえらいね』と褒められたよ。この間は、お姉ちゃんも挨拶のことで褒められたよ。」

と話していた。僕はもう、挨拶をすることがあたりまえになっていた。なので、うん、うんとうなずいた。

小学校六年生になり、僕は通学班の班長になった。先頭で挨拶をして歩いていると、後に並んでいる一年生の子たちも、挨拶をする

ようになった。それを見ていた校長先生が、挨拶のことで、班の皆を褒めてくれた。その日の夕食のとき、久しぶりに母から、

「挨拶はきちんとしている？」

と聞かれた。僕は自信をもって、

「しているよ。」

と答え、その日のことを話した。すると母が、

「そういうことが自然にできるってすごいね。これからも続けられるといいね。」

と話していた。

六年生のある日のこと、僕の挨拶や返事について、

「声がかいだけじゃん。」

「返事だけだったらする意味なくない？」

「なんか声が気持ち悪い。」

と言った人がいた。僕はそれを聞いて、何も感じることはなかった。

なぜなら、それは自分がいいと思ってやっているとだったからだ。

僕は挨拶をやめようという気持ちにはならなかった。そのくらい、僕の中で挨拶や返事をするのがあたりまえになっていた。それからまた、同じことを言われることがあったが、気にせず続けていく

と、そのうちに何も言われなくなった。

中学生になり、父と母に、

「勉強はちゃんとやっている？」

「忘れ物はしていない？」

と聞かれ、返事をしないことがあった。返事をしない僕に、父と母は何度も聞いてくる。また、その日の夕食のとき、母が、

「返事をすることして、どういうことだったかな？」

と聞いてきた。そのとき、姉が、

「分かりました、ってことだよね。」

と答えた。そして父が、

「最近の遥矢は、返事がないから、分かりませんってことかな？」

と言った。それを聞いて、最近の僕は、(そんなこと、言われなくても分かってる。返事をするのが面倒くさい。)と感じていた。しかし、家族で話してきたことを、ふと振り返り、返事をするこの大切さを思い出した。父に、
「家ではそれほどきちんと返事をしなくてもいいけれど、分かった、という合図はしていこう。」
と言われ、僕はうなずいて、
「はい。」
と答えた。

中学校では、先生や友達に挨拶をすることを心がけている。友達に挨拶をして返事が返ってきたら、それがきっかけで話をする事ができ、仲良くできる気がする。前は自分から挨拶をしていたが、友達からも挨拶をしてくれるようになった。そこからどんどん会話が広がっていく。

夏休み前、担任の先生から、中学校に入学してからの挨拶のことで褒められた。そのことを家族に話すと、

「遥矢は小さい頃から、挨拶のことで褒められることがたくさんあるね。」

と父から言われた。僕は自信満々に、
「そうでしょう。」

と答えた。それから母に

「中学生になってからも、大きな声で挨拶をすることが恥ずかしいと思うときははない？」

と聞かれ、

「ない。」

とはつきり答えた。それを聞いた姉が、笑顔で、

「お母さんが、挨拶と返事をしようね、と言っていたのにね。」

「声の大きさは、雰囲気と場所で調節しないとね。」

と言い、家族みんなで大笑いした。僕は、ただ大きな声で挨拶する

のではなく、時や場所を考えてしなければいけない、と思った。
小学生の頃、友達に挨拶や返事のことではいろいろ言われたように、これからも言われてしまうかもしれない。けれど、言いたい人は言えよと、聞き流そうと僕は思っている。褒めてもらいたいのからするのではなく、幼い頃から僕にとって「あたりまえになっていること」だから、続けていく。